

ノコギリヤネから見えてくる「まち」

(断章“ノコギリヤネのある風景”その15)



▲ ノコ仕舞いの一風景 (インスタグラムから)

この夏、一つのノコギリヤネが閉じられた。それに先立つ六月、現場で、「のこぎり屋根工場に関する座談会」が催された。主催者は、前作で紹介した宮田さんである。

家を建てる際には、通常、地鎮祭、上棟式(いわゆる「建てまい」)など祝いの儀式が行われる。一方、家を閉じる時、解体する時は何もない。お世話になった建物に別れと感謝を告げる行事があっても良いのではないかと以前から思っていた。

今回の催しは、まさにその思いに応えてくれるものであった。

当日は、のこぎり二に集う人たちの参加があった。宮田さんは小さい頃から、会場となったノコギリヤネを遊び場として慣れ親しんできた。

お祖母さんとの交流を描いた作品の展示と思い出の語りに始まり、手作りのお菓子を振る舞った参加者との交歓は、このノコギリヤネを見守ってきた“カミさま”との共食の場でもあり、そこには直会(なおらい)の儀式に通じるものを感じた。これぞ、ノコギリヤネの正しい閉じ方、「のこ仕舞い」の実践である。

ずっと閉じられていたノコギリヤネ。ここに堆積する記憶は、家族の記憶だけでなく、「まち」の記憶でもある。小さな私的な集まりの場が、新たな「まち」の発生を予感させ、ノコギリヤネが開く「場」の可能性が見えてきたように思う。ノコギリヤネは、家族と「まち」をつなぐインターフェイスである。

ノコギリアン (神奈川県藤沢市在住/のこぎり二にノコギリアン・コウバを主宰)

1. 「まち」が見えない？

それは、瞬きした直後だった。眼下に起の市街地が広がっている。私、いや、私の視点は、墨会館の上空にある。マスミダカラスの仕業に違いない。案の定、例の声が聞こえてきた。

「私が開いて公になる」を考えあぐねていたようだから、少し付き合ってみようと思ったのさ。「引いて見る」と、気づくことがあるんじゃないか。ノコギリヤネも見えるだろう。どうだ、何が見えてきた？

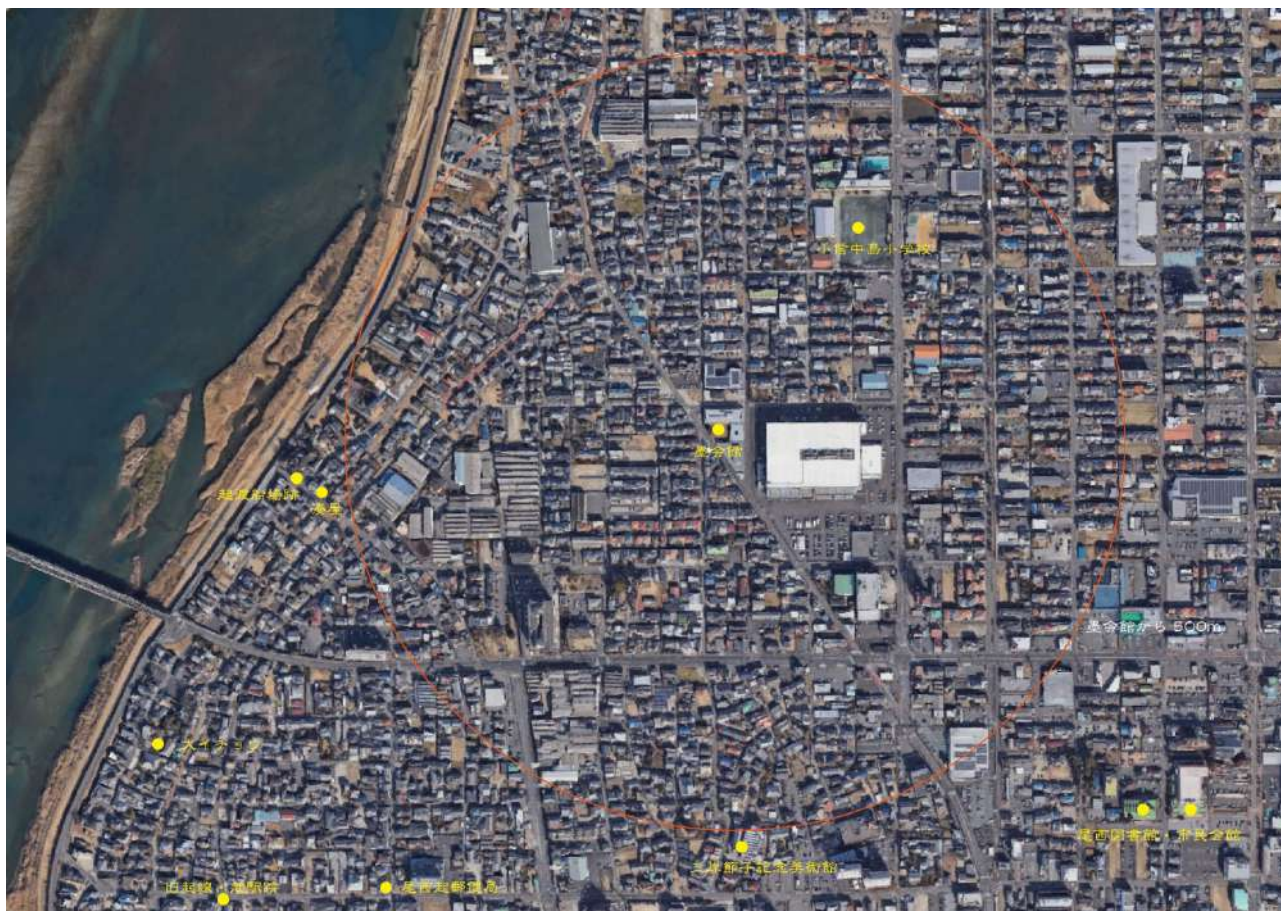
そうだな、「まち」が見えてこない。いや、現にそこにあるじゃないかと言われそうだな。「まち」は、もともと区画を意味するものに過ぎないとも言われているが、「まち」という言葉には、それ以上の何かが込められているように思う。

かつて、ここには、いくつかの「まち」があった。起宿があった。多くの人で賑わう商店街があった。繊維業の盛んな「まち」があった。だが、いま、「まち」を感じられない。

それは、単なるノスタルジーじゃないのか。昔は良かったという…

「まち」は、多くの人々が住み、働き、遊ぶところだった。多様な人との交流、複雑な人間関係があれば、自由もあった。そこには、いいことも悪いこともあっただろう。そんなものが失われてしまい、のっぺりとした均質的なものに成り果てているのが現状ではないか。

ひとつの要因は、「まち」が失われてしまったからではないかと思う。



▲ 見えなくなった「まち」

2. 「みち」がなくなった？

今度は、「みち」がなくなっただと？ また、おかしいことを言う。これを見ても。

目の前に、道路が抽出された画像が映し出された。マスミダカラスの言うとおりで。でも、歩いている人がいない。人が行き合い、出会いがある。そして、言葉が交わされ、意思が伝わり、活動が起きる。そこに「まち」が生まれる。「みち」が「まち」を作ってきた。人が歩いていなければ「みち」ではない。それは、通行のための道路に過ぎない。かつて、「みち」は開放的で自由な空間だった。そこで、色々なことを学ぶ。そして、子どもたちにとって、「みち」は遊びの場であった。まさに「未知」の空間だった。

かつて木曾川沿いに、都と東国を結ぶ街道が配置され、宿場町が形成された。起宿の始まりである。人、ものが行き交い、情報がもたらされる。やがて、農村地帯は毛織物の一大生産地として発展する。商店街が賑わい、路面電車の通る「みち」ができた。

しかし、移動手段が徒歩から自動車へ移行し、生活圏の拡大に伴い、賑わっていた商店街から人が消えていった。また、農地の住宅地化は、短い行き止まりの通路を発生させた。歩く機会が失われていった。「みち」が、通行の機能を担うだけの道路になってしまった。

「まち」は「みち」だけで構成されるわけではない。住まいがある。学校がある。工場もある。オレたちのねぐらになる神社の森や公園もあるじゃないか。



▲ 「みち」がなくなった「まち」

3. 「うち」が閉じられた？

また、目の前の画像が変わった。ネガ写真のように、「みち」が白くなり、囲まれたところが黒く映し出された。そうだな、まさに「地と図」の反転だ。主役が、「みち」から「うち」になった。極論すれば、「まち」は「みち」と「うち」から構成されている。公共空間の「みち」に対して、囲まれた街区は、さしずめ「うち」という私的空間だ。もちろん、「うち」の中にも公園や学校などの公共空間はある。

「うち」は、私的空間と公共空間に区分され、原っぱのような所有や利用が曖昧な空間がなくなっていった。また、農村や寺社などの共同体の所有する土地が、「公（おおやけ）」が支配する公共空間として管理が厳重になっていく。そして、「みち」は自動車通行の公共性が優先され、歩行者は排除されていく。閉じられた「うち」は、「みち」との交流を失い、「まち」から分断されていった。

「みち」が道路になり、「うち」が閉じられ、「まち」が消えていくということか。

ただ、「うち」を閉じることで、「まち」の持っている危険性や煩わしさから逃れてきたとも言える。しかし、失ったものは大きい。本来の「まち」が持っていた自由さというか…

お前たちは翼がないから、不自由だな。本来、私というのは、もっと自由なはずだ。公というのは、私の集まりじゃないのか？ そうだとすれば、公という空間には、もっと自由が必要じゃないのか。オマエたちは、「公（おおやけ）」に飼い慣らされているように見える。



▲ 「みち」と「うち」が分断された「まち」

4. 私が開いて、ノコが起つ：ミチノコ、ニワノコ、オクノコ

感謝するよ、マスミダカラス。だんだん分かってきた。最後に、ノコギリヤネを見せてくれ。

ノコギリヤネは、近代化、産業化を担った「まち」の象徴だ。この地域で生まれ発展したものだ。多くが閉じられたが、貴重な木造建築ストックである。木造建築は、心地よい寸法体系、素材感覚を持ち、光、風、音、匂いなどを直に伝える。ノコギリヤネは、再利用の価値とともに、存在そのものに大きな価値があるように思う。それこそ、「まち」に必要なものだろう。

「みち」と「うち」をつなぐインターフェイス。自由をともなう公共性の復活とともに、道に接する「ミチノコ」、庭に接する「ニワノコ」、その奥に位置する「オクノコ」という立地の違いが、多様な公共的空間を創出するだろう。工場（コウバ）が「公場」になる。

「私（ム）が開いて（八）、公になる」という公の字の語源は、オマエに教えてもらったけれど、一説には公の旧字は叀だという。口は広場で、八はそれに通じる道、壁を表し、広場での行事を意味するものらしい。ノコギリヤネに通じるものがある。

いや、ノコギリヤネそのものじゃないか。口の上に置かれた八は、窓付きの屋根だ。

そうか。まずは、ノコギリヤネをからっぽにして、広場として開けばいい。使い方なんかその後だ。「まち」には、昔の原っぱのように機能化されていない自由な空間が必要だ。それが「まち」の原動力となる。オマエが満開の桜に見立てた「ノコギリヤネの花開くまち」（ノコギリヤネのある風景・その14）。私が開いて公となる。それは、再び、「ノコが起つ」ということだ。



▲ 「うち」に残るノコギリヤネ

○エピローグ：「建築家なしの建築」

宮田さんのノコギリヤネは、オクノコだった。写真にノコギリヤネの外観を捉えることができない。それは、宮田さんが描くノコギリヤネの絵に通じる。家族の思い出は、心のウチで展開されるものである。ノコギリヤネは、外も内も奥が深いのである。

私の手元に、『建築家なしの建築』（ARCHITECTURE WITHOUT ARCHITECTS）というタイトルの本がある。ルドルフスキーという建築家・批評家の著作で、半世紀以上も前の古いものであるが、未来を予感させてくれる。世界各地のバナキュラー（土地固有の）な建築を紹介している。日本の民家も含まれる。いま、尾張西部に残るノコギリヤネは、無名の大工たちの手になる「建築家なしの建築」に他ならない。

墨会館は、「世界の丹下」と呼ばれた建築家による建築である。その中庭は、工場群による周囲の喧騒の遮断を目的としたらしいが、ウチにつくられた私的な公共空間として、「まち」の起点となることを期待していたかもしれない。まるで、ノコギリヤネの未来を暗示するかのよう。

1920年代、今和次郎という建築家が世相や風俗を分析する考現学を提唱した。それは、関東大震災後に出現した応急のバラック建築の観察から始まった。安普請と揶揄されるノコギリヤネに通じるものがある。ノコギリヤネからは、いろいろなことが見えてくる。地域、社会、家族のことなど。「まずはノコギリヤネを開け」と無責任なことを書いたけれど、それは、2,000棟ものノコギリヤネが残るここできしかできない「まちづくり」の始まりになると思うからだ。

さて、今年のノコギリアンガッカイ2023のテーマは、「ノコギリヤネ考現楽」を想定している。ただ、考現学を名乗る学問的アプローチは手に余るので、「考現楽」と記してノコギリヤネを楽しむことに重きをおくものである。宮田さんちの「のこ仕舞い」の参加も期待しつつ。

本日、11月3日は文化の日である。冒頭の「のこ仕舞い」から、すでに半年近く経ってしまったが、七年前の今日、のこぎり二で「のこ座」が立ち上げられたことが思い出される。記念すべき日である。私が開いて、ノコが起つ。

2023.11.3（文化の日／ノコギリヤネ記念日）



▲「建築家による建築（墨会館）」と「建築家なしの建築（ノコギリヤネ）」（©二川幸夫）